

被害者の声

性暴力被害の現状と回復への道のり

一般社団法人 Spring スタッフの方

Spring は、日本で初めて法人化された性暴力被害当事者を中心とした団体で、性被害の実態に見合った刑法性犯罪規定となるよう、被害当事者が自らの体験を伝え、政策を提言していく活動を行っております。私は被害当事者として2018年からSpringのメンバーとなり、キャンペーンやロビイングなどの活動をしています。

では、男児・男性の性暴力被害の実態ですが、Springは2020年に性被害の調査アンケートを行い5,899件の回答を得ました。被害者が「性別・性自認」を「男性」と回答したのは65件、全体の約1%でした。これは「男性の被害も積極的に答えてほしい」と広報しなかったためと推察されます。男性の被害は「挿入を伴う」が18件、「体に触れる」が33件。「加害者の性器などを触らせられた」「加害者に服を無理やり脱がされた／脱がさせられた」などがあり、「撮影による被害」は3件でした。

回答した男性の割合はNHKのアンケート結果と同様で、数字に現れない暗数が非常に多いと指摘されています。これは、2017年までは男性が性犯罪の被害者と見なされない法制度だったこと、本人も周りも被害と認識できなかったことが挙げられています。

それでは、私自身の被害体験と回復への道のりをお話しします。私は小学生3、4年の頃に顔なじみの年上の異性から被害にあいました。小さな頃から時々遊んでもらう関係で、自宅や相手の家で計3回別の日にありました。最初の被害は、話しているうちに相手が服を脱ぎ、「これをするのは、あなたを注意するため」と言われました。何が起きているのか全くわからない状態で、うつむいて体が固まり、言われるがまま従う状態でした。

2回目、3回目も呼び出され、「前と同じような怖いことがあるんじゃないか」と不安でしたが、逆らえない、嫌だけど断れない。前よりも行為がエスカレートしていき、「誰にも言っちゃダメ」と言われ、家族にも誰にも言えず黙って何もなかったように過ごしました。

これは言っちゃいけないことなんだろうという気持ちがあり、誰にも言わないでいました。夜は眠れず、学校で授業中に寝てしまうことがよくありました。ただ、完

全に寝てしまうわけではなく、神経は高ぶっていて机に突っ伏していました。周りの友達が起こそうとしても起きない感じになり、友達にイスを蹴られて床に転がっても起きない。体育の授業中に校庭でしゃがんだまま動かなくなり、先生におんぶされて保健室に連れていかれることもよくありました。先生たちは「この子はどうしたんだろう」と思っていたでしょうが、原因がわからない。恐らく、家族にも学校側から伝わっていたと思いますが、家族と話し合うことはありませんでした。周りから「どうしたの?」と声をかけられても、恐らく性被害のことは言わなかったと思います。

中学2年生頃から学校に行けなくなりました。その時は性被害が関係しているとわからず、なぜ自分が休んでいるのか、行けないのか、自分自身もわからなかったです。成長するにつれて、死にたいという気持ちがたびたび襲ってきました。死ねないかと絶食を試みたりもしました。大学生になったぐらいから、遺書を書いたり、自殺企図をしたり。いないほうがいいんじゃないかという思いがずっとありました。

自己肯定感がないという思いがあって、そのためか、何か人の役に立つことをしようと高校や大学時代にボランティア活動に参加するようになりました。活動を通じて知り合った女性と話せるようになり、ある日、性虐待の被害を打ち明けられました。いろいろと聞いていくうちに、もしかして自分も同じ被害だったのではないかと感じました。その人から紹介された本を読み、いろいろと調べていくと、自分の身に起きたことは性虐待で、自分の苦しみの原因が見えてきました。本を読んでいったことで、性被害に寄り添ってくれる人がいることを知り、自分は一人じゃないんだと思えるようになりました。

それでも不安定な状態は続いていて、急に引きこもる、死にたいと悩んでしまうこともありました。そこで相談する気持ちになり、初めて大学のカウンセラーに「自分は性虐待にあったんじゃないかと思う」と話しました。しかし、ただ傾聴するという感じで、精神科に行っても薬を出されるだけで、中断したという形でした。

親に思い切って話すと驚いていました。とても受け止められなかったと思います。「そういうことは忘れたほうがいい」と言われ、話は終わりました。信頼している男性に話しましたが、「それはうらやましいな」と言われ、これ以上は話せない。性被害の話は受け止めるのが難しい、わかってもらうのは難しいものなんだと感じました。

初めて性被害を詳しく話せたのは、男性の性被害者の自助グループを見つけて参加したときでした。解決する方法を見つけなきゃと、いろいろ調べたら、一つだけ

首都圏にありました。ずっと抱えていた不安や焦燥感、自分を責める気持ちを話した後、心に平和というか、平穩というか、すごく落ち着くような感覚を持ったのを覚えています。男性の性被害が社会に認知されない中で、その自助グループには、被害にあっても話せない、話したらばかにされる、そうした苦しい思いをしてきた仲間がいる。自分一人じゃないし、わかってくれる人がいるという気持ちがありました。回復に向けて頑張っている人がいることを知ったのは、とても大きかったです。

トラウマを抱える人を支援する道を進もうと、精神保健福祉学とか心理学を学びました。それが自分の不安定さの対処方法を身につけ、コントロールできるようになっていくうえで大きな力になりました。トラウマ治療のワークショップやセミナーに参加し、セラピーを通じて、ようやく症状が少しずつ治まってきました。#MeToo運動では、勇気を出して声をあげ、社会を変えようとしている人たちの存在を知りました。

Spring と出会い、政治や社会に動きかけて加害者が正当に裁かれる刑法にしよう、被害は被害としてちゃんと認められるようにしよう、という活動を知りました。なんて力強いグループかと思い、希望と光を見つけてイベントに参加し、スタッフに応募しました。温かく受け入れてもらい、すごく感謝しています。Spring の活動で特に印象に残っているのは、国会議員連盟の会合で、初めて性被害を受けたことを話したときです。自分の声が政治に届き、大事に扱ってもらえている、そんな思いが得られました。

昨年、性交同意の有無を中核的要件とする改正刑法が実現しました。現在は残った課題の解決と、さらに被害者支援や医療機関の治療が整備された社会になるよう取り組みを進めています。そういった活動自体が私自身の支え、回復の力になっています。

さて、事前に質問をいただいていた、支援者側に求められる姿勢とは何か、というのがありました。一つは二次被害を起こさないこと。二つ目は当事者の心理状況を学んで深く理解したうえで声かけをしてほしいということ。あと、トラウマ&バイオレンス・インフォームドケア。

トラウマは個人の心の問題ではなく、構造的・社会的状況によって発生し維持されているという視点から、何も手が打たれずに続いているコミュニティの状態、社会の状態を構造から転換していくことで、重要なアプローチだと思います。

子どもたちが相談できる環境づくりについての質問ですが、一つは信頼できる大人の存在。二つ目は生命の安全教育、包括的性教育と啓発です。三つ目、四つ目は、相談窓口や心理的サポート体制がすべての自治体に整えられること。五つ目は家族や学校、地域社会を含めた周囲の理解と連携です。六つ目は、相談した後にどうなるかがわかっていることです。ここがわからずに不安で、相談できない被害者はとても多いと思います。海外には、24時間体制で子どもも家族も相談できるホットライン、専門的なカウンセリング、学校や地域と連携した教育プログラム、性虐待に対する警察、福祉、医療、心理など専門家の一体的対応などの取り組みがあります。

日本では、NPO 法人「CAP センター JAPAN」が子どもへの暴力防止を目的としたプログラムやワークショップを地域や学校向けに行っています。NPO 法人「チャイルドファーストジャパン(CFJ)」は司法面接と体の診察、心のケアを一つの場所でしていますが、全国で1カ所のみ。こういった場所がすべての自治体に設置されて、包括的な連携を図っていただきたいと思います。

最後に、まだ支援体制のマンパワーにばらつきがあり、急性期の対応しかできないことが多いです。私のように子どものときの性被害でフラッシュバックして相談しても、話を聞くしかできない、支援できないということで、本当に苦しい状況だと思います。なので、中長期の被害者も支援できる体制をつくっていただきたい。何十年も前の性被害でも、今も毎日のようにさまざまな症状に耐え、苦しみを強いられている方が目の前に本当に多くいらっしゃいます。そうした苦しみを軽減したい。被害者のケアがされず、加害者も処罰されずに放置されている理不尽な状況です。被害当事者を励ましてくれる支援者、Spring で出会った仲間たちが、私が活動を続けている原動力になっています。

